

題目 非協力者の適応的価値を探る
—ホモ・エコノミクスに惹かれる人々—

氏名 林祐己

指導教員 高橋伸幸

伝統的な経済学では、人間は合理的な自己利益追求者であるという仮定の下で研究が行われてきた。その仮定された人間モデルはホモ・エコノミクス (Homo Economicus : 以降 HE と表記) と呼ばれる。Yamagishi et al. (2014) は、HE の実在を経済ゲームにおける参加者の行動から確認し、さらに HE が持つ特徴を明らかにした。また、HE と行動様式は似ているものの心理的特性は全く異なる準ホモ・エコノミクス (quasi-Homo Economicus : 以降 qHE 表記) という存在を明らかにした。HE は長期的視野を持ち状況対応に長けるという適応的な特徴を持つのに対し、qHE は衝動的で共感能力に欠けるという非適応的な特徴を持つ。しかし、Yamagishi, et al. (2014) では、HE と qHE はどちらも一定数存在するものの、その割合はかなり少数であることも示された。このように、適応的な特徴を持つ HE が少数派にとどまる要因として、本研究では非協力的であるという評判が HE の適応度を下げていると考えた。しかしそうだとすると、非適応的な特徴を持ち、なおかつ非協力的であるという評判も生まれるであろう qHE がなぜこの世に一定数存在しているのだろうか。本研究ではその疑問に対する解答として、qHE は何かしらの適応的な意義を有しているからだと考えた。そして生殖の観点から、「qHE を好意的に評価する層が一定数存在するのではないか」という仮説を立てた。仮説の検証方法として、qHE がどのように評価されるのかを調べるために、qHE の特徴を模した人物が登場するシナリオを作成し、その人物に対する印象を調査した。また、比較のために HE を含む qHE とは別の 3 タイプの人物を想定したシナリオをそれぞれ作成した。さらに、qHE を好意的に評価する層について調べるために、心理尺度や社会経済的地位などの個人属性を分析することによって、参加者の個人属性が各タイプの登場人物に対する印象評定にどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、仮説を支持する、つまり qHE を好意的に評価する層が一部確認された。そして、それらの qHE を好意的に評価する人は、欲求に対して自己の制御ができない傾向を持つ可能性が高いということが示唆された。